

# 周作クラブ会報

(第67号)  
2017年6月20日発行

## 周作クラブ

### ◆主な記事◆

原典の旅 軽井沢 町田市民文学館 連載樹座30年④	23面
文学セミナー 長崎文学館便り	4面
周作クラブ長崎便り	5面
原稿発掘「白桃」	6面
映画「沈黙」の感想	7面
	8面
	9面
	10面
	11面

文学セミナー——於・軽井沢高原文庫（5月21日）

## ペトロ岐部の生涯を辿る

高橋 千劔破

ペトロ岐部は、豊後国東（くにさき）半島出身の邦人司祭である。江戸時代の初めに、日本人として始めてエルサレムの聖地を踏んだ。

岐部氏は、中世国東半島の豪族である。いまも国東周辺には、岐部姓が多い。ペトロ岐部の父はロマノ岐部、母はマリア波多と伝えられる。父母は、浦辺地方の、キリシタンの中心人物であった。

その二人の間に生まれたのがペトロ岐部で、天正十五年（一五八七）に生まれ、洗礼名をペトロとされた。

ペトロ岐部は、有馬のセミナリオで勉強し、十九歳になった慶長十一年（一六〇六）、イエズス会に入る決心をしたが、受け入れられず、同宿となった。カスイというのはその時につけた号というが、意味は不明、どのような漢字を当てるかも解っていない。

慶長十九年、宣教師の国外

日本へ帰る機会がなかった。一六二七年（寛永四）、シヤム（タイ）に渡り、二年間アユタヤの日本人町に潜伏して機会を待ったが果たせず、一六二九年にマニラに移った。

マニラ港口のルパンダ島から、ミゲル松田と共に自ら小船を買って渡航を企てたのは、一六三〇年のことであつた。その後台風に遭って難航したりし田が、何とか薩摩の坊ノ津に上陸。その後長崎で迫害下のキリシタンのために働き、のちに東北地方へ移ったが、寛永十六年（一六三九）、仙台領で逮捕された。江戸に送られ、將軍家光の御前で吟味を受けた。同年七月、古伝馬町の牢屋敷で穴吊りの拷問にかけられたが、屈せず、ついに穴から出されて処刑された。五十三歳であった。

（写真・田村百合子）

— 1 —



高原文庫大藤副館長と筆者



キビタキが鳴く高原文庫広場にて

追放によってマカオへ行き、一六一八年（元和四）インドへ渡った。そこから陸路で聖地エルサレムへ行き、さらにローマに行った。一六二〇年十一月十五日、ローマで司祭となり、同月二十日、イエズス会に入会した。

一六二二年、帰国の途につき、ポルトガルへ行った。そこから一六二五年インドへ。つづいてマカオへ渡ったが、

そのペトロ岐部の生涯を描いた作品が『殉教者』（講談社）の作者が、我が「周作クラブ」の加賀乙彦会長。構想三十年の力作です。

加賀会長が最初にエルサレムを訪れたのは、一九八九年のことです。二年前に遠藤周作夫妻を代父母に、奥様とご一緒に洗礼を受けられました。その後、神学者の門脇佳吉神父に誘われて巡礼の旅に出かけたということです。

ペトロ岐部の研究は進んでいます。インドのゴアからシリアのアレッポへの経路は不明です。シルクロードを行くルートと、アラビア海から砂漠の道を行く二つが推定されていますが、加賀会長は海上のルートを採用します。かつて見たアラビア海を思い浮かべたとき、国東半島で育ったペトロ岐部が、水夫となって櫓をこぐ姿が想像できた

ということですが、ともあれ、まだ読ん